

資 料

成長とどうつきあうか －中国環境問題シンポジウムに参加して－

笠 松 浩 樹

How Do We Come to Terms with Growth?
Thoughts Based on Participation in an International Symposium

Hiroki KASAMATSU

要 旨

「日本と中国における食と環境に関する国際シンポジウム」で到達した最大の課題は「成長とどうつきあうか」であると感じた。急速に成長する中国では、第1に食料の量的・質的充足を満たす農業・食料政策を講じること、第2に農村の意義を失わないこと、第3に消費を抑えることが重要となる。環境容量の中で、成長と生産には上限があることを認識しながら、今後の食料需要の高まりを乗り切ることが求められる。

「成長とどうつきあうか」。2008年11月1日、江蘇省農業科学院にて開催された「日本と中国における食と環境に関する国際シンポジウム」で感じた最大の課題である。本シンポジウムでは、食料の生産・消費と土地や水といった資源の利用について、両国の研究者が様々な角度から専門的な報告を行い、刺激的な議論を展開した。私も、稚拙ながら日本における過疎地域の背景と現状を紹介させていただくとともに、農地管理や農村への人口環流の可能性について貴重な指摘を得ることができた。

シンポジウムの翌日、南京を出発し、無錫を経由して上海へ向かった。市街地や高速道路沿いには、高層マンションが次々と建築されている風景が目立つ。モデルルームの展示会場は大規模な体育館のようである。無錫を通過した際に団地を数えてみたが、島根県の人口がすっぽり入るのではないかと感じるほどに戸数が多かった。人々が急速に都市部へ向かっている状況を目の当たりにした次第である。

南京と上海のホテルでテレビを見てみると、自動車と携帯電話の宣伝がとても多いことに気づいた。消費社会

化が進んでいることの表れでもあり、お金がどこに使われているのかも想像できる。マンション、クルマ、ケータイ。この点は日本とあまり変わらないのかもしれない。

中国はまさに経済成長の真っただ中にある。これについて、標題になぞらえて次の3点に触れておきたい。

まず1点目は、今後の農業・食料政策についてである。過去半世紀の間、耕地面積は減少したが、食料生産量は品種改良と栽培技術の進展に支えられて60年前の4倍強となり、急増した人口の食を支えている。今後も増え続ける人口に対応すべく、食料生産量を増加させなければならない。現在の水準の耕地面積を維持して高い食料自給率を保つことは、政策が最優先にすべき課題である。いくつかの報告では、これに対処する方法として遺伝子組換えが挙げられていたが、その是非を十分に検証することは不可欠である。さらに、食の量的充足とともに質的充足にも対応する必要が新たに浮上してきている。この点について、シンポジウムでは明確な方向性が出なかったが、近い将来に直面する大きな課題である。

2点目は、過疎問題である。日本の場合、1960年代の

高度経済成長期を支えてきたのは自国の資源ではなく、海外からの輸入であった。食料、エネルギー、資材の生産現場であった農村は本来の意義を失い、耕作放棄地や管理されない森林が無秩序に拡大している。過疎問題がある種の文明問題ととらえるならば、食、環境に密着した農法、住まい方、農林地管理のしきたりや掟などの風土や文化の消失は重大な問題である。中国では経済成長と資源自給を両立させ、かつての日本のように農村の意義が失われないことを願いたい。

3点目は、日本的に言うならば「足を知る」ということである。食料生産量を維持できたとしても、国民1人あたりの消費カロリーが増加すれば食料自給率は低下する。これに関して、雲南大学の尹先生が、食料問題の解決は科学技術に頼るだけではなく文化を変えなければならないとし、「自分で自分の口をコントロールする」

必要があると述べられた。我々現代人にとって、消費に対する欲求を自己規制することは至難の業かもしれない。しかし、食料をはじめとする資源問題は、この点なくしては解決しないと感じる。

「成長とどうつきあうか」。それは、地球上の全ての資源には限りがあることを前提として、成長にも生産にも自ずと上限値があることを改めて認識することではないだろうか。言い換えれば、環境容量の中でいかに生きるかということでもある。世界的に食料需要が高まっている中、世界最多の人口を有する中国の動向に注目したい。

注記

「天地人」第5号（総合地球環境学研究所中国環境問題研究拠点，2009年1月25日発行）掲載分を採録。



写真1 江蘇省農業科学院。



写真3 急速に建築が進んでいる無錫のマンション地帯。



写真2 科学院前の街路樹は木陰ができるように仕立てられている。



写真4 日本では過疎化によって耕作放棄地が増加した。